動機と行動の関連性についての素朴理論¹

伊藤公一郎² 名古屋大学³ 池上知子 大阪市立大学⁴

Naive theories about the relationship between motives and behaviors

Koichiro Ito (Nagoya University) and Tomoko Ikegami (Osaka City University)

People have naive theories about the relationship between motives and behaviors. Based on recent developments in attribution theories and negativity bias in social perception, we hypothesized that people would associate negative behaviors only with negative motives, while they would associate positive behaviors with not just positive, but also negative motives. These hypotheses were tested in three studies. In Studies 1 and 2, we found that behavioral information inconsistent with naive theories was best recalled under conditions with no cognitive load. However, this recall advantage dissipated when participants were under time pressure during the encoding of the behavioral information. In Study 3, participants were presented with positive and negative behaviors, and were asked to infer the actors' motives from these behaviors. The results showed that naive theories guided their inferences: negative motives were likely to be inferred from negative behaviors, whereas both negative and positive motives were inferred from positive behaviors. Implications for attribution theories and negativity bias in social perception are discussed.

Key words: motive attributions, attribution theories, reason explanations, negativity bias.

The Japanese Journal of Psychology

2006, Vol. 77, No. 5, pp. 415-423

他者の行動の背後にある動機を推論することは、行為者についての評価を下したり、その行動によってもたらされる結果を予測したりするのに必要不可欠である。しかしながら、動機は目に見えない構成概念であり、直接それを知ることが不可能である以上、いかなる動機を推論するかは知覚者の主観に委ねられているといえる。そのため、人々が主観的に行う動機の推論にどのような傾向がみられるかを明らかにすることは重要であるといえるだろう。本研究では、様々な行動とその背後にある動機との関連性について、人々が暗黙の信念を持っており、その信念に基づいて動機を推

論し行動を理解するということを提案し、それを三つの研究によって検証する。最初に、Ybarra (2002) が提唱した行動の素朴な因果理解に関する理論化と近年の帰属理論の研究動向を参考にしながら、その信念の性質を論じる。

Ybarra (2002) は、人は様々な規範を有する社会の中に生きており、また、そういった社会に適合しようとする欲求を持っているために、社会的に好ましい(ポジティブな)行動は促進され、社会的に好ましくない(ネガティブな)行動は抑制されると論じている。このような社会の中で他者の行動を観察し学習すると、人が行うポジティブな行動は規範的圧力(外的要因)に従ったものであるとみなす傾向が高まる。他方、ネガティブな行動は、規範的圧力に反する行動であると解釈され、それは行為者の性格特性(内的要因)が原因となって生じたものであるとみなすようになる。すなわち、人はポジティブな行動と外的要因を、そして、ネガティブ行動と内的要因を関連づける素朴な因果理解を形成するようになるという。

人々がこのような因果理解を形成している可能性を示唆する研究はいくつか存在する。例えば、Miller (1984) は、身近な人物の行った行動の理由を説明させると、人はポジティブな行動については外的要因

Correspondence concerning this article should be sent to: Tomoko Ikegami, Department of Psychology, Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, Sumiyoshi-ku, Osaka 558-8585, Japan (e-mail: ikegami@lit.osaka-cu.ac.jp)

¹ 本研究は、第2著者の指導のもとに第1著者が愛知教育大学大学院教育学研究科に提出した修士論文をまとめ直したものである。

² 伊藤公一郎氏は2006年10月に交通事故に遭い亡くなりました。謹んで哀悼の意を表します。

³ 本研究を実施した時点での所属は愛知教育大学大学院教育学研究科であった。

⁴ 本研究を実施した時点での所属は愛知教育大学教育学部であった。

を、ネガティブな行動については内的要因を挙げる傾向にあることを見出している。また、Ybarra & Stephan (1996) は、ポジティブな行動は外的要因、ネガティブな行動は内的要因によって生起するという素朴な因果理解に一致する行動情報は、一致しない行動情報よりも再生されやすいこと、その傾向は認知的な負荷をかけた場合であっても変わらないことを示した。以上の知見は、人はポジティブな行動と外的要因を、ネガティブな行動と内的要因に関連づけて理解するという Ybarra (2002) の主張と整合しているといえよう。

ところで、近年の帰属理論研究者 (Kammrath, Mendoza-Denton, & Mischel, 2005; Malle, 2004; McClure, 2002; Reeder, Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence, 2004) は、人が他者の行動を理解するためには、その人物の心的状態 (e.g., 動機, 意図) を推論することが重要であると主張している。例えば、上位者に取り入ろうとして援助行動をする場合と、特別な利害関係のない他者に自ら進んで援助行動をする場合とでは、同じ援助行動であってもその意味は異なり、利己的な動機が推論される前者の行動はより低く評価される (Reeder et al., 2004)。Malle (1999) は、意図性の異なる様々な行動を調査協力者に提示し、行為者が“なぜその行動を行ったか”を推測して自由に記述するよう求めたところ、意図性の高い行動を説明する際には行為者の欲求や信念といった心的状態に言及しやすいことを明らかにしている。

そこで、本研究では、心的状態の役割を重視する近年の帰属理論の研究動向を踏まえ、かつ Ybarra (2002) の見解を参考にしながら、動機の推論の性質について検討することにした。Ybarra (2002) が論じたように、我々がポジティブな行動をするよう促される規範的圧力の中に生きているのであれば、ポジティブな動機を持っていたとしても、また、ネガティブな動機を持っていたとしても、人は可能な限りポジティブな行動をするはずである。そのような社会で他者の行動を観察し学習すれば、人はポジティブな行動の背後にポジティブな動機を推論するだけでなく、ネガティブな動機をも推論する傾性も持つようになると考えられる。一方、ネガティブな行動は社会的規範をあえて破る行動であり、人々はその行動の背後にはネガティブな動機があると当然のように考えるであろう。すなわち、人は、ネガティブな行動からネガティブな動機は推論するが、ポジティブな動機を推論することは稀であると考えられる。

以上の考察を踏まえて、本研究では、ポジティブな行動はポジティブな動機とネガティブな動機の両者に関連づけ、そして、ネガティブな行動はネガティブな動機にもつぱら関連づけるという動機と行動の関連性についての素朴理論を人々が持っている」と提案し、三

つの実証的研究を行い検証する。先述のように、Ybarra & Stephan (1996) は、原因に関する情報が付加された様々な行動についての再生記憶が内的要因・外的要因と行動の関連についての素朴理論の影響を受けることを示し、その存在を主張した。研究 1 と研究 2 では、Ybarra & Stephan (1996) に倣い、行動情報の再生記憶を指標として、人が動機と行動の関連性についての素朴理論を持っているかどうかを検証する。研究 3 では、ポジティブな行動とネガティブな行動を調査協力者に提示し、その行動の背後にある動機を自由に記述させることにより、素朴理論に沿った動機の推論を行うかどうかを検証する。

研究 1

Ybarra & Stephan (1996, Experiment 2) は、行動とその要因との関連性についての素朴理論を人々が持っていることの根拠として、素朴理論に一致する内容の行動情報 (i.e., 外的要因に帰属されたポジティブな行動, 内的要因に帰属されたネガティブな行動) がそうでない行動情報に比べて再生されやすいという実験結果を報告した。研究 1 では、Ybarra & Stephan (1996) に準ずる実験手続きを用いる。もし人が先述のような動機と行動の関連性についての素朴理論を持っているのであれば、Ybarra & Stephan (1996) の知見と同様に、素朴理論に一致する内容の行動情報の再生がその他の行動情報の再生に比べて多くなるはずである。すなわち、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動とネガティブな動機に基づくポジティブな行動、そしてネガティブな動機に基づくネガティブな行動は、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動よりも再生されやすいと予測される。

方 法

実験参加者 25 名の大学生 (すべて女性) であった⁵。

行動記述文 研究 1 で使用する行動記述文は予備調査 ($N=43$) によって選定された。予備調査では、まず、行動記述文 (e.g., 子どもを怒鳴りつけた) を 50 文提示して、各“行動自体”の好ましさを評価させ、その後、それらの行動に動機の推論を可能にする文脈情報を付加した 100 個の行動記述文 (e.g., 近所で火遊びをしていた子どもを怒鳴りつけた) を提示し、その行為の背後にあると考えられる“動機の”好ましさを評定させている。それぞれの評定は 7 件法 (1: 非常に好ましくない—7: 非常に好ましい) で行われた。この予備調査の結果から、行動および動機の評定平均値が中点 (4 点) よりも大きいのか小さいかを基準にし

⁵ 通常、行動の記憶に関する研究で性差はみられないが、男性を実験参加者として結果が再現できるかどうかは今後の課題である。

て、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動を表した行動記述文を5文 (e.g., 被災地で人が困っていると聞いたので、ボランティア活動に参加した：行動の評定は $M=4.91-5.88$, $SD=0.83-1.13$, 動機の評定は $M=5.09-6.26$, $SD=0.79-1.23$), ネガティブな動機に基づくポジティブな行動を表した行動記述文を5文 (e.g., お詫びのしるしにお金をもらったので、友人の過ちを許した：行動の評定は $M=4.58-6.02$, $SD=0.80-1.04$, 動機の評定は $M=2.79-3.84$, $SD=0.94-1.46$), ポジティブな動機に基づくネガティブな行動を表した行動記述文を5文 (e.g., 本人の成長につながるので、新入社員にわざと仕事を押しつけた：行動の評定は $M=1.81-3.07$, $SD=0.84-1.27$, 動機の評定は $M=4.33-5.52$, $SD=0.92-1.27$), ネガティブな動機に基づくネガティブな行動を表した行動記述文を5文 (e.g., その高名な医者は金持ちだったので、こびを売った：行動の評定は $M=2.21-3.12$, $SD=0.89-1.16$, 動機の評定は $M=1.91-2.67$, $SD=0.81-1.21$) の計20文を選定した⁶。

実験装置 実験の制御はパーソナル・コンピュータ (SHARP, FJ520R) で行った。行動記述文の提示には Microsoft Office PowerPoint 2003 を使用し、プロジェクトを介して立て掛け型の大型スクリーン上に提示した。

手続き 実験は1-3名で行われた⁷。実験の協力に関する同意書の内容を確認、署名してもらった後に、実験の目的について、“他者の行動を評価する傾向と数学的な処理能力との関連を調べる研究である”と偽って説明した。最初に練習試行として、注視点 (+++++) を5秒間提示した後に評価的にニュートラルな行動記述文をスクリーンに20秒間提示し、その間に行動の好ましさを7件法 (1：非常に好ましくない-7：非常に好ましい) で評定し配布した評定用紙に回答してもらった。

次に本試行が行われた。本試行では、予備調査で選ばれた20の行動記述文をランダムな順番で1文ずつ各文20秒間提示した。その20文に加えて、最初の1文と最後の2文には記憶における初頭効果と新近効果を消去するためにニュートラルな行動記述文を提示した。各行動記述文が提示される直前には注視点5秒間提示された。行動記述文が提示されている20秒の間に、練習試行と同様に7件法の尺度で各行動の好ましさを評定してもらった。本試行終了後、短期記憶に

⁶ 予備調査と使用した行動記述文の詳細については第2著者に問い合わせされたい。

⁷ 実験は小さな実験室で行われたため、3名が同時に実験に参加する場合には、1人が2人の前の席に座ることになったが、提示される行動記述文が見えにくいよう座席を配列した (スクリーンから座席の前列までの距離は約2m、後列までの距離は約3m)。また、提示された行動記述文の文字の大きさについても、見えにくいよう配慮した。

残っている行動情報を消去するための挿入課題として、簡単な計算課題に3分間取り組んでもらった。

計算課題終了後、提示した行動文の自由再生を求めた。できるだけ多く、できるだけ正確に、思い出したものから順番に配布した回答用紙に記述してもらった。また、文言が正確に思い出せない場合には、覚えているおおよその意味内容を記述するよう教示した。再生課題の制限時間は8分間であった。再生課題終了後、デブリーフィングを行った。再生課題を予期していた参加者や仮説に気づいていた参加者はいなかった。

結果と考察

行動の評価 行動の種類ごとに評定値の平均を算出し、1要因の分散分析 (ANOVA) を行ったところ有意であったため ($F(3, 72)=185.32$, $p<.01$), Ryan法による多重比較を行った。その結果、すべての水準間で有意差がみられた ($ps<.01$)。すなわち、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動 ($M=5.98$, $SD=0.51$), ポジティブな動機に基づくネガティブな行動 ($M=4.35$, $SD=0.58$), ネガティブな動機に基づくポジティブな行動 ($M=3.54$, $SD=0.61$), ネガティブな動機に基づくネガティブな行動 ($M=2.13$, $SD=0.65$) という順で好ましく評価されていた。これは、単に行動の好ましきだけでなく、動機の好しさも考慮して評価された結果であるといえ、ここで使用した行動記述文が妥当であったということを示唆している。

行動の記憶 回答はおおむね正しく再生できているものを正再生とみなした。実験参加者が再生したすべての行動記述文について、正再生とみなせるかどうかを2人のコーダーが判断した結果、その一致率は97.9%であった。コーダー間で一致しなかった回答は話し合いによって正再生とみなすかどうか判断された。行動の種類ごとに平均正再生数を算出した。Figure 1

Figure 1. Mean free recall by behavior type.

に示されているとおり、再生パターンは当初の予測とは異なっていた。そのため、探索的な分析として 1 要因の ANOVA を行ったところ主効果が有意であった ($F(3, 72) = 4.50, p < .01$)。Ryan 法による多重比較の結果、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動は、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動よりも再生数が多く ($t(72) = 2.85, p < .03$)、さらに、ネガティブな動機に基づくポジティブな行動よりも有意に再生数が多かった ($t(72) = 3.13, p < .03$)。ポジティブな動機に基づくポジティブな行動とネガティブな動機に基づくポジティブな行動の再生数の間に有意な差はみられなかった ($t < 1$)。また、ネガティブな動機に基づくネガティブな行動は、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動やネガティブな動機に基づくポジティブな行動よりもやや再生数が多かったが、その差は統計的に有意ではなく、どの行動情報と比較しても有意な差はみられなかった ($ts < 2.14$)。

以上の結果は、Ybarra & Stephan (1996) の論理に従って最初に予測していた再生パターンとは異なっていた。すなわち、他の種類の行動に比べて再生されにくいと予測していたポジティブな動機に基づくネガティブな行動が反対に最もよく再生されていた。しかしながら、この結果は異なる視点から解釈することができる。なぜなら、人には暗黙の信念や期待に反する予想外の社会的事象に対してより多くの注意を向け、作業記憶において精緻な処理を行う傾向があり、その結果としてそれらの事象の記憶に優れるという知見が存在するからである (Macrae, Bodenhausen, Schloerscheidt, & Milne, 1999)。これらの知見を考慮すれば、人は先述のような動機と行動の関連性についての素朴理論を確かに持っており、それが当初の予測とは異なる形で影響を及ぼしたとも考えられる。すなわち、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動は素朴理論に反する行動情報であるがゆえに、他の行動に比べてより多くの注意が向けられ、より精緻な情報処理がなされたために再生数が高まったのかもしれない。

もし、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生が作業記憶において精緻な処理を受けたために多くなったのであれば、そのような精緻な処理を妨げるような認知負荷を実験参加者にかけることは、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生にのみ顕著に影響するはずである。そして、素朴理論に一致するその他の行動情報の再生は、認知負荷の影響をあまり受けないと考えられる。事実、期待や信念に反する社会的情報の処理がそうでない情報よりも認知負荷の影響をより大きく受けることが多くの研究で示されている (Bargh & Thein, 1985)。それに加えて、先述のように Ybarra & Stephan (1996, Experiment 3) も、行動情報を符号化する際に認知負荷 (時間的圧力) をかけた実験群を統制群と比較し、彼らのいう素朴理論

に合致する行動情報の再生が認知負荷の影響を受けにくいことを示した。以上の知見を参考にして、続く研究 2 では、行動情報の符号化時に認知負荷をかける群と認知負荷をかけない統制群を設定して行動情報の再生パターンを比較する。

研究 2

研究 1 でポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生数が多かったのが素朴理論に反する情報であるためにより多くの注意が向けられ、より入念な処理がなされた結果であるのなら、その行動情報の再生数は、時間的圧力をかけられた実験参加者群 (負荷あり条件) の方が、時間的圧力をかけられない実験参加者群 (負荷なし条件) よりも顕著に少なくなると考えられる。一方で、素朴理論に一致するその他の種類の行動情報の再生数は、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動よりは認知負荷の有無による再生数の差異が小さいと考えられる。すなわち、行動の種類と認知負荷との交互作用が予測され、認知負荷の効果はポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生により顕著に表れると予測される。

方法

実験参加者と実験計画、行動記述文 実験参加者は 31 名の大学生 (すべて女性) であった。実験計画は 4 (行動の種類) $\times$ 2 (認知負荷の有無) の混合要因計画で、前者は参加者内要因、後者は参加者間要因であった。負荷あり条件に 16 名、負荷なし条件に 15 名がランダムに振り分けられた。使用した行動記述文とその提示を制御する実験装置は研究 1 と同じであった。

手続き 実験手続きは研究 1 とほぼ同じだが、以下の 3 点で異なっていた。(a) すべての実験は 1 人ずつ行われた。(b) 各行動記述文の提示時間は、負荷なし条件で 10 秒間、負荷あり条件で 3 秒間であった。提示間隔は両条件ともに 1 秒であり、研究 1 と同じくこの間に注視点が提示された。(c) 行動記述文の提示時間が短い負荷あり条件では研究 1 のような評定用紙を用いた好ましさの評定が困難なので、両条件ともに行動の好ましさは口頭で評価してもらった (好ましいと思う場合は“マル”, 好ましくないと思う場合は“バツ”)。行動記述文が提示されている間に評価できなかった場合でも、慌てずに次の行動の評価をするよう教示した。

結果と考察

行動の評価 行動の種類ごとに“マル”と回答された行動の数の平均を求め、その値を従属変数として 4 (行動の種類) $\times$ 2 (認知負荷の有無) の ANOVA を行った (時間内に評価できなかった行動が一つ以上ある負荷あり条件の 5 名の実験参加者はこの分析からは除

外した)。その結果、行動の種類の主効果が有意であった ($F(3, 72) = 127.20, p < .01$)。また、交互作用も有意であった ($F(3, 72) = 4.28, p < .01$)。Ryan 法による多重比較の結果、負荷なし条件ではすべての行動の種類間に有意差がみられ ($ps < .01$)、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動 ($M = 4.73, SD = 0.70$)、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動 ($M = 3.40, SD = 1.30$)、ネガティブな動機に基づくポジティブな行動 ($M = 2.07, SD = 1.10$)、ネガティブな動機に基づくネガティブな行動 ($M = 0.20, SD = 0.41$) の順に好ましいと判断された行動の数が多かった。これは研究 1 の評価のパターンと同じであった。

負荷あり条件では、ポジティブな動機に基づくポジティブな行動のほとんどが好ましいと判断されており ($M = 4.91, SD = 0.30$)、どの種類の行動と比較しても好ましいと判断された数は有意に多かった ($ps < .01$)。また、ネガティブな動機に基づくネガティブな行動は好ましいと判断されることはほとんどなく ($M = 0.09, SD = 0.30$)、どの種類の行動と比較しても好ましいと判断された数が少なかった ($ps < .01$)。負荷なし条件と異なるのが、ネガティブな動機に基づくポジティブな行動 ($M = 3.09, SD = 1.14$) とポジティブな動機に基づくネガティブな行動 ($M = 2.73, SD = 1.10$) の間で好ましいと判断された行動記述文の数の平均に有意な差がみられない点である ($t < 1$)。しかしながら、認知負荷の有無は行動の評価に多少の影響を与えていたが、どちらの条件でもポジティブな動機に基づくポジティブな行動とネガティブな動機に基づくポジティブな行動の評価の間に、また、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動とネガティブな動機に基づくネガティブな行動の評価の間に有意な差がみられたことから、負荷あり条件でも負荷なし条件でも、研究 1 の結果と同様に実験参加者は実験者の意図した通りの動機を推論していたといえよう。

行動の記憶 研究 1 と同様に、2 人のコーダーによって実験参加者の回答が評価された。一致率は 95.4% であった。コーダー間で一致しなかった回答は両者の話し合いによって正再生とみなすかどうか判断された。行動の種類ごとに平均正再生数を算出し、4 (行動の種類) $\times$ 2 (認知負荷の有無) の ANOVA を行った (Figure 2)。その結果、行動の種類の主効果 ($F(3, 87) = 3.78, p < .02$) と認知負荷の主効果 ($F(1, 29) = 8.68, p < .01$) が有意であった。より重要なことに、交互作用が有意であった ($F(3, 87) = 3.63, p < .02$)。負荷なし条件における行動の種類単主効果が有意であり ($F(3, 87) = 7.04, p < .01$)、Ryan 法による多重比較の結果、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動はポジティブな動機に基づくポジティブな行動よりも有意に再生数が多く ($t(87) = 3.88, p < .02$)、また、ネガティブな動機に基づくポジティブな

行動と比較しても有意に再生数が多かった ($t(87) = 3.68, p < .02$)。ポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生数とネガティブな動機に基づくネガティブな行動の再生数との差は有意傾向であった ($t(87) = 2.13, p < .08$)。ポジティブな動機に基づくポジティブな行動とネガティブな動機に基づくポジティブな行動の再生数の間に有意な差はなかった ($t < 1$)。この負荷なし条件の再生パターンは研究 1 とほぼ同じであった。負荷あり条件では、最もネガティブに評価されたネガティブな動機に基づくネガティブな行動が他の行動に比べてやや再生数が多かったが、行動の種類単主効果は有意ではなかった ($F < 1$)。

仮説の検証にとって重要なのは、認知負荷が行動の種類ごとに異なる影響を及ぼしているかどうかである。単純主効果の検定の結果、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動においてのみ認知負荷が影響しており、負荷なし条件よりも負荷あり条件の方が有意に再生数が少なかった ($F(1, 116) = 18.73, p < .01$)。その他の行動では認知負荷の効果は有意ではなかった ($Fs < 1$)。

以上の結果は、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動の再生数には認知負荷がある条件とない条件とで有意な差があり、その他の行動では差がないという予測と一致していた。このことは、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動は人々が持っている信念に反しており、その他の行動は信念に合致しているということを示唆している。

ところで、もし本研究で提案するような動機と行動の関連性についての素朴理論を人々が持っているとするならば、その素朴理論に一致する情報の処理は認知負荷による妨害を顕著には受けないと予測していた。もしそうであるのなら、負荷あり条件では、素朴理論に一致する行動情報の再生数は素朴理論に反する行動情報の再生数よりも多くなると考えるのが自然であろう。しかしながら、結果としては負荷あり条件の行動

Figure 2. Mean free recall by behavior type and cognitive load.

情報の再生数はどの行動の種類の間にも有意な差はみられなかった。そのため、素朴理論に反する行動情報の処理が認知負荷の影響を顕著に受けたという結果が素朴理論の存在を示唆してはいるものの、必ずしもそれを積極的に支持するものとはいえないだろう。そこで、続く研究 3 では、素朴理論が存在するのかどうかを、行動から動機を推測するという課題を用いてより直接的に検証する。

研究 3

研究 3 では、実際に行動から動機を推論するとき、本研究で提案するような素朴理論に沿った推論をするかどうかをより直接的に検証する。調査協力者に複数のポジティブな行動とネガティブな行動が記述された質問紙を配布し、それらの行動から行為者の動機を想像して自由記述してもらう。もし、人が先述のような素朴理論を持っているのであれば、ポジティブな行動から動機を推論するときには、行動と同じ好ましさの動機 (i.e., ポジティブな動機) を推論しやすいだけでなく、行動の好ましさに反する好ましさの動機 (i.e., ネガティブな動機) にも言及すると考えられる。一方で、ネガティブな行動から動機を推論する場合には、もっぱら行動と同じ好ましさの動機 (i.e., ネガティブな動機) に言及し、行動の好ましさに反する好ましさの動機 (i.e., ポジティブな動機) を推論する程度は低いと予測される。

方 法

調査協力者 145 名の大学生 (女性 101 名, 男性 44 名) であった。欠損値のあった 12 名の回答と質問紙に記載されていた教示の意味を理解していなかった 1 名の回答は分析から除外した。

行動記述文 提示した行動記述文はポジティブな行動を表した七つの行動記述文 (e.g., お年寄りに席を譲った) とネガティブな行動を表した七つの行動記述文 (e.g., 犬に石を投げつけた) であった。これらの行動記述文は、研究 1 で述べた予備調査の“行動のみ”の好ましさの評定平均値に基づいて選ばれており、研究 1 と研究 2 で使用された行動記述文とは異なり、動機の推論を容易にするような文脈情報は含まれていなかった。ポジティブな行動を表した七つの行動記述文の評定平均値 ($M=5.81-6.19$, $SD=0.77-0.98$) はそれぞれ中点よりも有意に高く ($ps<.01$), ネガティブな行動を表した七つの行動記述文の評定平均値 ($M=1.19-2.63$, $SD=0.45-1.16$) はそれぞれ中点よりも有意に低かった ($ps<.01$)⁸。

⁸ 七つの行動の評価の平均を比較したとき、その極端さ (中点からの乖離) には七つのポジティブな行動 ($M=1.95$) と七つのネガティブな行動 ($M=2.08$) との間に有意な差はなかった ($t<1.38$)。

手続き 調査は大学の授業時間の一部を利用して実施した。質問紙は、行動記述文を読んでその好ましさを 7 件法 (1:非常に好ましくない-7:非常に好ましい) で回答してもらう評価課題と、それぞれの行動記述文から行為者の動機を推論する推論課題に分かれていた。推論課題には以下のような教示文が付されていた。“人は、様々な意図・目的 (動機) を持って行動しています。以下には、いろいろな人物が行ったいくつかの行動が記述されています。それぞれの行動について、‘なぜそのような行動を行ったか、その行動を行った意図・目的 (動機) は何か’を、あなたなりに自由に想像して記述してください。回答には正解や不正解はありません。思いついたものを自由にお書きください。”なお、それぞれの行動から二つの動機を自由に推論してもらい回答欄に記述してもらった⁹。評価課題も推論課題も行動記述文はランダムに配列されていた。さらに、評価課題と推論課題の両者ともに、前半の 7 文と後半の 7 文を入れ替えたもう 1 種類の質問紙を用意し、調査協力者に対してランダムに配布した。

結果と考察

コーディング 自由記述は、2 人のコーダーが F. Ex コーディング・スキーマ (Malle, 2004) に基づいて、(a)ある行動が無意図的行動であるとみなされた場合になされる要因説明 (cause explanations), (b)行為者の動機や意図に言及する理由説明 (reason explanations), (c)行為の理由に先立ち、その理由を引き起こすような要因に言及する理由の因果履歴説明 (causal history of reason explanations), (d)ある意図的行動を完遂するのがいかにして可能であったかを説明する可能要因説明 (enabling factor explanations) という四つのカテゴリーに大別した¹⁰。その後、動機や意図に言及する理由説明に含まれた自由記述をその好ましさに応じてポジティブ、ネガティブ、ニュートラルに分類した。分析に用いたのはポジティブな理

⁹ もし人が本研究で提案したような動機と行動の関連性についての素朴理論を持っているのであれば、動機の推論の特徴は、行動の好ましさに反する好ましさの動機を推論する割合の違いに表れるはずである。ところが、行動の好ましさに反する好ましさの動機を推論することは、一致する好ましさの動機を推論するのに比べて認知的な労力が必要であるかもしれない。そのため、行動から動機を一つだけしか推論させないのであれば、一致する好ましさの動機が推論されやすくなり、もし素朴理論を持っていたとしてもそれがこの指標では検出されにくくなる。本研究では測度の敏感さを上げるために二つの動機を推論してもらった。

¹⁰ F. Ex では単文が分類対象となるが、研究 3 の調査協力者の自由記述に重文は含まれていなかった。したがって、各調査協力者が 14 の行動に二つずつ行動説明をしたため、合計で 3 696 個の自由記述が分類の対象となった。これらの分類の詳細については、Malle (2004, Chapter 4, Appendix) を参照。

Table 1
Mean number (*SD* in parentheses) of inferred motives

Favorability of behaviors	Favorability of inferred motives	
	Consistent with behaviors	Inconsistent with behaviors
Positive	4.79 (2.26)	1.71 (1.73)
Negative	5.54 (2.15)	0.84 (1.01)

由説明とネガティブな理由説明であり、今回の研究目的とは関係のないその他のカテゴリーに含まれた自由記述は分析に用いなかった。2人のコーダーによる分類の一致率は85.6% ($\kappa=.81$)であった。分類が一致しなかった自由記述は2人のコーダーの話し合いによってどのカテゴリーに含まれるかが決定された。

行動の評価 七つのポジティブな行動に対する評価はすべてが中点よりも有意に高く ($ps<.01$)、七つのネガティブな行動に対する評価はすべてが中点よりも有意に低かった ($ps<.01$)。以上の結果から、調査者の意図通りポジティブな行動はポジティブに、ネガティブな行動はネガティブに評価されていたことが確認された。

動機の推論 ネガティブな行動とポジティブな行動のそれぞれについて、行動の好ましさと同じ好ましきの動機を推論しているとみなされた自由記述の数の平均と標準偏差、行動の好ましさに反する好ましきの動機を推論しているとみなされた自由記述の個数の平均と標準偏差をTable 1に示す。自由記述の個数を従属変数として、2 (行動：ポジティブ、ネガティブ) $\times$ 2 (動機の好ましき：行動の好ましきと一致、行動の好ましきと不一致) のANOVAを行った¹¹。その結果、動機の主効果が有意であり ($F(1, 131)=470.76, p<.01$)、行動と同じ好ましきの動機が、行動に反する好ましきの動機よりもより多く推論されていた。より重要なことに、交互作用が有意であった ($F(1, 131)=21.74, p<.01$)。Table 1に示されているように、ネガティブな行動からその好ましきに反する好ましきの動機 (i.e., ポジティブな動機) を推論する傾向は、ポジティブな行動からその好ましきに反する好ましきの動機 (i.e., ネガティブな動機) を推論する傾向よりも有意に低かった ($F(1, 262)=354.03, p<.01$)。

この結果は予測を支持している。すなわち、人はネガティブな行動からはもっぱらネガティブな動機を推論し、ポジティブな行動からはポジティブな動機とともに、ネガティブな動機をも少なからず推論する傾向にあった。ただし、ポジティブな行動からポジティブな動機が推論される傾向とネガティブな動機が推論される傾向の間にも有意な差があった ($F(1, 262)=$

151.81, $p<.01$)。この研究で用いた行動記述文のように動機の推論を容易にするような文脈情報が含まれていない行動情報から動機を推論するときには (すなわち、行動だけを見て動機を推論するときには)、そもそも行動の好ましきに反する好ましきの動機を推論することにより多くの認知的労力が必要であるのかもしれない。そして、人は“認知的倏約家”であるため (Fiske & Taylor, 1991)、ネガティブな行動からはネガティブな動機を推論し、ポジティブな行動からはポジティブな動機を推論しやすいと考えられる。しかしながら、それにもかかわらず、ポジティブな行動からはネガティブな動機が比較的推論されやすい傾向が示されたのは、そのような推論を導く何らかの要因があったことを意味している。それは、ポジティブな行動とネガティブな動機を関連づけている素朴理論の働きということになるだろう。

総 合 考 察

本研究では、人が動機と行動の関連性についての素朴理論を持っているということが提案された。その素朴理論は、ネガティブな行動はネガティブな動機と、そしてポジティブな行動はポジティブな動機とネガティブな動機の両者と関連づけられているというものであった。研究1と研究2では、行動情報の再生記憶を指標として、人が素朴理論を持っているかどうかを検証された。行動情報の符号化時に認知負荷がない条件では、素朴理論に反している行動情報 (i.e., ポジティブな動機に基づくネガティブな行動) は他の行動情報よりも再生数が多かった。ところが、符号化時に認知負荷をかけた場合には、素朴理論に反する行動情報の再生数は大きく減少し、しかも減少の仕方が他の行動情報に比べて顕著であった。以上の結果は、ポジティブな動機に基づくネガティブな行動が人々の持っている信念に反していること、それ以外の行動は人々の信念に合致していることを示唆している。研究3では、もし人が上記の素朴理論を持っているのであれば、行動からの動機の推論はその素朴理論に方向づけられると予測された。調査協力者に行動から動機を推論し自由記述してもらったところ、ネガティブな行動からはもっぱらネガティブな動機が推論されていたが、ポジティブな行動からはポジティブな動機が推論されやすいだけでなく、ネガティブな動機も少なからず推論される傾向にあった。以上の三つの研究の結果は、人が本研究で提案したような動機と行動の関連性についての素朴理論を持っていることを強く示唆するものである。

Malle (1999) は、人が他者の意図的行動を説明するときに行為者の意図や動機に言及することを明らかにした。本研究で得られた知見によって示唆されるのは、その言及の仕方にも一定の偏りが生じるかもしれ

¹¹ 理由説明をした総数を分母とした“割合”を用いて分析しても同様の結果が得られた。

ないという点である。すなわち、行動の種類によって言及されやすい動機が異なっており、特に興味深いのは、ポジティブな行動を説明するときにはネガティブな動機にも言及する可能性があるという点である。ネガティブな社会的刺激に敏感に反応するというネガティブ・バイアスが人の心理現象の様々な領域で確認されているが (Baumeister, Bratslavsky, Finkenauer, & Vohs, 2001), 本研究が示唆しているのは、動機の推論においては、ポジティブな行動からもネガティブな行動からもネガティブな動機を推論する傾性を持っているという点で、人はネガティブな動機により敏感であるという可能性である。ネガティブな動機を推論しやすいということは、悪意を隠し持つ他者がもたらすかもしれない不利益を回避する可能性を結果として高めることにつながるであろう。そのため、このような推論傾向を持っていることは適応的であるといえるかもしれない。

ここで、本研究で実証した動機と行動の関連性についての素朴理論と、Ybarra (2002) の行動についての因果理解に関する理論との関係を考察しておこう。両者は、ポジティブな、あるいはネガティブな行動に対して人々が行っている因果分析について記述しているという点では共通している。しかしながら、両者の間には、その前提に根本的な相違点があることを指摘しておきたい。人が他者の行動を因果分析するとき、行動の原因を行為者か状況のどちらかに帰属するという、いわゆる“人—状況の二分法” (person-situation dichotomy) は帰属理論の伝統的な考え方であった。先に解説したように、Ybarra (2002) の理論もこの二分法を前提としている。しかしながら、Malle (2004) をはじめとする近年の帰属理論研究者たちは、この単純な二分法に対して強烈な批判を加えている。行動の原因を人か状況に峻別することは現実には困難であり、過去の帰属理論研究の手法では、それを実験者が恣意的に区別してきたか、あるいは区別するように実験参加者に強制してきたに過ぎないというのが彼らの主張である¹²。そして、実際に他者の行動を理解するときには、人は“なぜその行動を行ったか”を知ろうとし、行為者の動機や意図といった心的状態を推論するのが自然であると彼らは主張する。本研究で提案した動機と行動の関連性についての素朴理論は、このような主張と軌を一にしているものといえる。先述した Ybarra (2002) と本研究の根本的な相違とは、他者の行動を理解するために人が持っている認識の枠組みとして人—状況の二分法を前提とするか、あるいは心的状態の理解を中心とした認識の枠組みを前提とするかの違いである。本研究は、ポジティブな、ある

いはネガティブな行動を理解するにあたって、人—状況の二分法を採用するのが本当に適切であるかを直接的に検証したのではなく、動機の推論においても特定のパターンがみられることを示した研究である。そのため、本研究で提案した素朴理論が、Ybarra (2002) の提唱する素朴理論よりも妥当性が高いとは必ずしも言い切れないが、近年の帰属理論の発展を踏まえれば、動機という概念を用いた本研究は、人の行動理解をより適切な形でとらえているといえるのではないだろうか。今後は、両者を直接的に比較し、どちらの素朴理論がより適切に人の行動理解を表現しているかを検証できるような研究が求められる。

引用文献

- Bargh, J. A., & Thein, R. D. (1985). Individual construct accessibility, person memory, and the recall-judgment link: The case of information overload. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 1129-1146.
- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Finkenauer, C., & Vohs, K. D. (2001). Bad is stronger than good. *Review of General Psychology*, **5**, 323-370.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (1991). *Social cognition*. 2nd ed. New York: McGraw-Hill.
- Kamrath, L. K., Mendoza-Denton, R., & Mischel, W. (2005). Incorporating if...then...personality signatures in person perception: Beyond the person-situation dichotomy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 605-618.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Schloerscheidt, A. M., & Milne, A. B. (1999). Tales of unexpected: Executive function and person perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 200-213.
- Malle, B. F. (1999). How people explain behavior: A new theoretical framework. *Personality and Social Psychology Review*, **3**, 23-48.
- Malle, B. F. (2004). *How the mind explains behavior: Folk explanations, meaning, and social interaction*. Cambridge, MA: MIT Press.
- McClure, J. (2002). Goal-based explanations of actions and outcomes. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European Review of Social Psychology*. Vol. 12. New York: Wiley. pp. 201-235.
- Miller, J. G. (1984). Culture and the development of everyday social explanation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 961-978.
- Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**, 530-544.
- Ybarra, O. (2002). Naive causal understanding of valenced behaviors and its implications for social information processing. *Psychological Bulletin*,

¹² ただし、Malle (2004) は、成功や失敗といった“行為の結果”は意図的行動ではないため、人—状況の二分法を採用することは不適切ではないと論じている。

128, 421-441.

Ybarra, O., & Stephan, W. G. (1996). Misanthropic person memory. *Journal of Personality and*

Social Psychology, 70, 691-700.

——2005. 6. 10 受稿, 2006. 5. 7 受理——